ScanSnap 導入事例 Vol.11

名刺管理

『ScanSnap』とSDKを駆使して名刺管理システムを開発、営業に活用
ピー・シー・エー株式会社 様

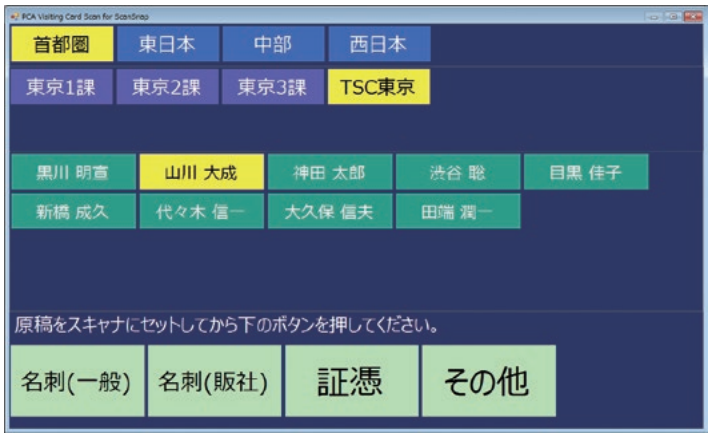
会計ソフトのリーディングカンパニー「ピー・シー・エー株式会社」では、『ScanSnap』の SDK（ソフトウェア開発キット）を駆使して、“ 営業にフル活用できる ” 名刺管理システムを開発し、『ScanSnap』とタブレット PC の組み合わせによってスムーズな運用も実現している。ソフト開発会社ならではの工夫と達成を具体的に見せていただこう。

ピー・シー・エー株式会社 様
会計ソフトや業務管理ソフトの分野で、中小企業にも導入可能なパッケージソフトをいち早く開発したパイオニア。高い開発力を武器に、低コストと高度なセキュリティを両立したクラウドサービスを他社に先駆けて開発・提供するなど、業界のリーディングカンパニーであり続けている。

簡単スキャンで名刺をデータベース化。年賀状や案内状も重複なし！

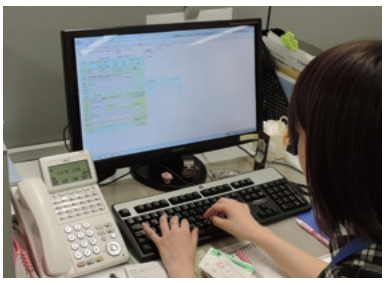
タブレットPCと“合体”した「iX500」で名刺をスキャン

ピー・シー・エー株式会社（東京都千代田区）のフロアの一角に、ユニークな見た目の「ScanSnap iX500」がある。富士通のタブレット PC「Arrows Tab」が上にセットされた “ 合体 ” 状態で置かれているのだ。タブレット PC の画面には、「名刺（一般）・名刺（販社）・証憑・その他」という 4 つの大きなボタンがある（①）。名刺や領収書などをセットして該当するボタンを押すと「iX500」がそれらをスキャンして即デジタル化。データは種類ごとのフォルダに送られるという仕組みだ。
これは全社で共有する名刺データベース作成のために工夫された独自システムで、それに経理用の「証憑」と資料用の「その他」のボタンを追加して完成を見たもの。現時点では担当者が一括スキャンを行っているが、将来はフロアの入り口などに置かれ、外出から戻った営業担当者が「今日の名刺」を自分でスキャンする、といった形での本格運用が予定されている。このシステムを構築した同社テクニカル・サポート・センターの黒川明宣さんと山川大成さんに詳しい話を伺おう。まずは開発のきっかけから。



①タブレット PC の画面。上で所属と氏名を選び、下の該当するボタンを押す。

「iX500」専用の「ScanSnap タブレットホルダー」（バード電子製）でタブレット PC をセット。
画面のボタンを押してスキャンする。


スキャンした名刺の文字情報を担当者が手で入力して名刺データを作成する（裏面本文参照）。

広く清潔なフロア。
ここに「iX500」が設置されている。

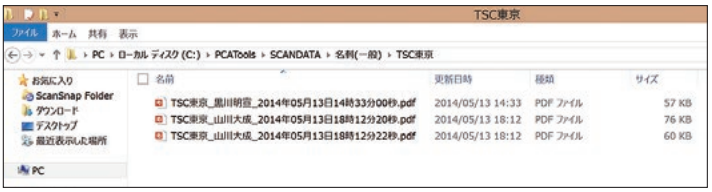
テクニカル・サポート・センターのセンター長・黒川明宣さん（左）と同課長代理の山川大成さん。

『ScanSnap』なら名刺両面の画像を添付できる！

「年賀状を同じ方宛てに何通も送る、お客様情報を管理する部署がある一方で営業がリストを作り直す、といった非効率を解決しようと名刺のデータベース化に乗り出しました」（黒川さん）
黒川さんたちが最初に作ったのは、Excel での管理を単純に移行した文字だけのデータベースだった。出来はよかったが、物足りない点があった。文字情報だけしか入れられないことだ。名刺で大切なのは役職や氏名だけではない。交換時に書き込んだ日付やメモが重要な意味を持つ場合があるし、裏面に印刷されている情報（支店一覧など）が便利な役割を果たすときもある。だが文字情報だけのデータベースにそれらは入らないし、入力された役職や氏名が「本当に正しいかどうか」を確かめる方法もない。
「そこで、名刺原本の画像を表裏とも添付可能な名刺管理システムを作ろうということになり、スキャナの機種選定に入りました。でもどの機種も一長一短で、『これだ』というものが見つかりません。そんなとき、山川がプライベートで使っていた『ScanSnap』の存在を知りました。『ScanSnap』なら手間をかけずに素早く名刺をスキャンでき、表裏セットの『1名刺・1ファイル』で画像を作成できます。またファイル名を自由に変えられるので、データベースへの取り込みがしやすくなります。私たちの求めていたスキャナがやっと見つかったという思いでした」（黒川さん）

SDKを活用して自社に合ったシステムを開発

さらに黒川さんたちは『ScanSnap』導入にあたり、『ScanSnap』の SDK（ソフトウェア開発キット）も活用した。既存のデータベースに画像を取り込むため、持ち前の技術を駆使して会社に合った独自システムを作ったのだ。



②スキャンすると「部署・社員名・スキャン日時」がファイル名に。
数字の羅列よりも視認性が高く、担当者が照合するときにミスが発生しにくい。

「SDK で組んだプログラムの中に『ScanSnap』を動かす機能を埋め込んだ設計になっています」（山川さん）
「誰でも簡単にスキャンできるように、タブレット PC から操作できるようにしました」（黒川さん）

システムの詳細は以下の通り。前出①の画面のボタンを押して名刺をスキャンすると、ファイル名に「部署・社員名・スキャン日時」が自動で付けられる（②）。担当者はスキャン画像と文字情報をデータベースへ登録する。
文字情報と画像を登録した画面が③と④。これが一人分の名刺データだ。同じ人の名刺がスキャンされた場合、内容に変更があれば更新する（以前の情報も履歴として残る）。また画像付きなので、手書きのメモを含めた全情報をいつでも確認できる。

③名刺データ画面。名刺原本に書かれていたメモを入力する欄や、閲覧者が自分用のメモを書き込む欄も設けられている。

④サムネイルをクリックすると名刺画像が開く。手書きのメモや、裏面に印刷された情報も直接確認できる。

名刺が“生きたデータベース”になる！

『ScanSnap』を活用した名刺データベースは、さまざまな効率化をもたらしている。年賀状を重複して送ることもなくなったし、他部署と付き合いのある訪問先で「いつも□□がお世話になっております」という挨拶から話を始められるようにもなった。営業戦略にも欠かせない。販促をかけたり、パートナーシップを結んだり、販売データを算出したりするために活用できるからだ。
「私たちはたまたま SDK を利用しましたが、目的はデータベース構築です。『ScanSnap』同梱の『CardMinder』を利用しても同じように名刺の画像と文字情報を一緒にデータベース化できるので、有効活用ができるはずです」（黒川さん）
死蔵されがちな名刺も、スキャンによって活用できるデータに生まれ変わる。デジタルへの入り口としての『ScanSnap』の向こうには、販売促進などにもつながる効率化の道が開けている。

ピー・シー・エー株式会社の業務管理ソフト「X シリーズ」。
証憑のスキャン画像などのドキュメントを関連づけ管理できるソフト「PCA eDOC X」が無償で同梱されているので、ここでも『ScanSnap』が活躍する。

【著作権について】 著作権の対象となっている新聞、雑誌、書籍等の著作物は、個人的または家庭内、その他これらに準ずる限られた範囲内で使用することを目的とする場合など、著作権法で定められた例外を除き、権利者に無断でスキャンすることは法律で禁じられています。なお業務利用では、著作権者の許諾が必要となることがありますので、著作権法、およびご利用になる企業や団体で定める利用規則等に従って利用して頂くようお願いします。本事例におけるスキャンは、私的使用の範囲か、または、著作権法上問題のない資料等が対象とされています。

販売店

［お問い合わせ先］ 株式会社PFU　イメージング サービス＆サポートセンター
TEL：050-3786-0811
＜受付時間＞月～金曜日 10時～12時、13時～17時（当社休業日除く）
E-mail: scanners@ml.ricoh.com

ScanSnap に関する詳細はこちら
https://www.pfu.ricoh.com/scansnap/